

授業方法について、独自に工夫している点と、アンケート結果を受けての改善点【教育科学系】

2020年度前期にオンデマンド授業を経験し、毎回の授業で課すコメント(小レポート)も期末レポートも、「まなびネット」で提出を求められるようになった。結果、特に期末レポートの草案に教員からコメントを返すことが可能になり、今回の調査でも学生から評価する声があった。また小レポート(オンラインテキストへの書き込み)については、あらかじめ答え方の「文例」を示すようにしている。小レポートに書く分量や書き方の見当がつかない学生も多いと思われ、これも評価する声があった。

●令和3年度前期の学内における実習科目は、新型コロナウイルス感染症の感染防止の観点から学生の人数を10名程度の4グループに分けて、必要最低限の対面授業による実習と遠隔授業で実施した。

改善点としては、手指消毒、マスク着用、体調管理、小人数等の感染防止に十分配慮して、対面授業による実習時間を増やしたい。

●令和3年度前期の学外における実習科目は、実習施設の受け入れ状況に応じて臨地実習と学内での実習、学内でのリモート講義を実施した。

改善点としては、新型コロナウイルス感染症の感染状況により臨地実習が実施できない場合は、Teams等を利用したリモート講義を実習施設に依頼して指導いただけるようにする。また、医療機関の実習施設は、感染予防対策としての体調管理だけではなく、ワクチン接種やPCR検査などを必須とする可能性があるため、臨地実習受け入れ要件について事前に情報提供してもらうようお願いする。

工夫点と思われるのは、少人数対面、多人数遠隔によって参加者一人一人への投げかけ、質問への応答の方法を変えていることです。少人数対面では、与えられた資料・文書への理解とそれへの新たな疑問を探索し、自らの作業によって、資料やデータを入手し、授業でのテーマをより深く追求するよう求めています。今回のアンケート結果では、回答数が少ないため、おそらく、回答した参加者のほとんどが、後者の努力を行った結果が、回答に反映されているのだと思います。少人数の対面授業(演習)においては、今後も、一人ひとりの考察の手順や発表への道筋を、授業者も一緒に伴走するという、手間と時間を惜しまない地道な方法で、取り組んでいきます。

一方、多人数の遠隔授業では、やはり、自らさらに考えを深めるための作業の多寡に差があると思われます。授業レジュメや資料で、かなり「読み・理解すること」、短い質問への回答提出で、その確認を、行ってきましたが、今後は、より、自主的作業を促すような課題設定を考えていきたいと思えます。

Ss科目(1)

聴覚障害領域を専攻する学生の聾学校教育実習前の授業として、聴覚障害児へ教科指導を行う上での配慮事項や注意点を踏まえた模擬授業形式で実施した授業である。聴覚障害児への教科指導は聴覚障害教育に携わる教員の専門性でもあるので容易に身に付けることはできないが、学生時代に少しでも意識して学んでくれたらありがたいという現場の声を聞いている。模擬授業を実施して教育実習に臨んだ学生は、現場での評価も高く、自信につながっていると実感する。回答した学生の数は少ないが、「強くそう思う」という回答が教員側の思いと学生側の意識に共通していたことを受け、今後も同様な形式の授業に力を入れていきたい。

Ss科目(2)

講座の聴覚障害領域担当の2名の教員でオムニバスの授業を実施した。6区分27項目という自立活動の幅広い内容を分担しながら特別支援教育(聴覚障害教育)に携わる教師の専門的な力を育成することを目的にした。2名の教員で常に情報共有しながら、授業を進められたことが学生の評価「強くそう思う」「ややそう思う」につながったと考える。今後も現場の課題や取組など新しい情報に敏感に教員の知識をアップデートしながら、特別支援学校教諭免許状を取得する学生の専門性向上に尽力していきたい。

Ss科目(3)

本来ならば、前期に終了する予定であったが、コロナ禍で子どもと触れ合う体験や演習が実施できなかった。2か所で実習する予定のうち、前期で実施できたのは1か所であった。後期に残り1か所での実習(演習)を予定している。特別支援を学ぶ学生にとっては、実際に障害児と触れ合う経験が必要であるので、実習受け入れ先と十分連携を取りながら進めていきたい。

・S科目3授業とMS科目2授業について

・実習の二つや演習については、授業内で討論の時間をなるべく多く設けて、他者の意見を聞くこととそれに基づいて考えることを試みているが、アンケート結果から考えると、なかなか他者の意見を聞く姿勢に難しさがあるように感じた。社会学では他者の生き方や考え方を知ることがすなわち学問であることを理解してもらうように、努力していきたいと思う。

・またアンケートによれば、自分自身で調べたり発展的学習をする点で、人によって差が出ているようだったので、資料や文献を紹介したりなどして、なるべくそうした取り組みへのきっかけづくりをしたいと思う。

学生からのコメントや質問事項は、なるべく次の授業で紹介し、他者の考えを知ったり、疑問の解消をしたりする機会となるようにしている。

ただし、その分どうしてもスライドの分量が多くなりがちなので、内容とのバランスを考えたい。

遠隔授業が主であったので、その利点を生かして、提出されたレポートのフィードバックを行った。主に、個別に返すのではなく、全体の傾向を伝え、どのように改善していけばよいのかということを伝えるようにしている。

学生は、課題をこなすことに精一杯で提出物の内容の質が低下する可能性があったためできる限り、具体的に課題の説明をし、何について議論すべきかを明確にすることで、回答しやすくするだけでなく、内容の質の向上に努めた。

アンケートの結果は、予想よりも遠隔に不満を抱いている学生は少ないように思うが、良かった点はどこか、悪かった点はどこか具体的な記述があると改善につなげることができると感じた。

今回の授業アンケートは、専門科目としてMS科目(1),MS科目(2)、BS科目(オムニバス)が対象となっており、専門科目は対面、BS科目(担当分)はオンデマンド形式で実施した。

評価を見ると、どの科目も概ね高評価であったが、特にMS科目(2)に関して、若干評価が低く、その要因は、自主的な学習の促しが足りないことのようにであった。実際、上級学年が対象であるMS科目(1)に比べ、MS科目(2)では、予習や課題の負担がやや軽かったため、そのような評価につながったのではないかと思う。

以上の点を鑑み、今後は予習・課題の分量を適切に設定することを改善点として考慮していきたい。

できるだけ身近な具体例を挙げ、興味を持てるように、また、できるだけ系統だった知識を提供できるよう心がけた。また、各疾患の病態生理についても生理学的知見も踏まえて解説し、理解を深めるよう努めた。

アンケート結果では、「授業で指示された課題・参考文献・資料などを自ら参照した上で、自分で問題点を深く考えた。さらに、その考えに基づき行動した。」の質問に対して『強く思う』が25%『やや思う』が69%であり、「授業を受けた上で、自ら関連項目について文献やインターネットなどで調査し、新たな思考を展開した。さらに、その思考に基づき行動した。」の質問に対しては、『強く思う』が19%『やや思う』が69%であったので、多くの学生は自分で問題点を考え新たな思考を展開したと推測される。しかし、回答率は39%と低く、あまり積極的に学習していない学生もある程度いたのではないかと推測される。

今年度の授業は、リモートと対面を半々ぐらいで行う予定であったが、緊急事態宣言の影響で、対面授業の回の一部をリモートに変更したため、対面で質疑応答は不十分であったかもしれない。今後は、リモートの良い点、対面授業の良い点を生かし、授業内容に応じてリモートと対面を併用しながら、より丁寧な講義を心がけるとともに、学生全員が積極的に授業に取り組めるよう、授業ごとに小テストを課す等、授業態度も評価できるように工夫したい。

初年次に必要な、大学生としての学び方、ネットの活用の仕方、これから必要となる化学や解剖学の基礎を、できるだけ平易に教示できるよう心がけた。また、最終週にはグループ発表を行い、調査方法やわかりやすい表現方法について実地で学べるよう努めた。

○独自に工夫している点

- ・実践事例を、資料や映像で、多数紹介した。自分が行ってきた実践なので、教師の立場での考え方、指導・支援の仕方、子供の生き生きとした様子を、伝えるよう努めた。
- ・教科横断的な視点での授業計画の立て方を指導し、学生が各自作成する場を設けた。
- ・総合的学習では、自分が行いたい単元展開を構想し、一人ずつステージで発表する場を設けた。
- ・学生のレポートをカテゴリー別に分け、重要な視点は、全体で共有し、フィードバックを丁寧に行うよう努めた。自分が書いている内容に、実は大事な意味があると感じる学生もいた。
- ・グループでの討論の際、メンバー構成を工夫し、他学科の学生と意見交流ができるようにした。自分と違う意見を聞くことが楽しく、学びも深まったと感じる学生が多かった。
- ・畑での栽培活動と調理活動を取り入れ、活動する中で、生活科の楽しさを実感できるようにした。その際、大学生はスムーズにできるが、子供の場合は時間を要することなど、具体的に話し、教師の支援の仕方を伝えた。
- ・遠隔授業は、地域に出かける活動の課題や、学生が自力でゆっくり読み理解をすすめられる資料を配慮した。

○改善点

- ・評価項目の観点「自分で問題点を深く考え、さらにその考えに基づき行動する」「自ら関連項目について文献やインターネットなどで調査し、新たな思考を展開し、その思考に基づき行動する」という内容を、自分の授業の中で意識して設定していなかったため、観点を考慮しながら授業の内容を構成するようにこころがけたい。
- ・学生が発表する時間を十分確保する。(発表時間が足りず、延びてしまったときがあった)
- ・オンラインの手続きが当初分からず、また、シラバスを何度も書き変えて、学生に迷惑をかけた。後期はできるだけ変更なしで行きたい。学びネットへの掲載をできるだけ早く、提出方法を分かりやすくする。
- ・学生同士の交流や実践的な活動をできるだけ取り入れていく。

Ss科目は、特別支援教育専攻の学生を対象に、1年生前期に、これから4年間特別支援教育を学んでいくために必要な特別支援教育の基本的知識を学修することに重点を置いているため、ほとんどの授業は、一斉講義とその後の小テストという形式を採用した。一方後半は、アクティブラーニング形式でグループワークを含んだ授業も取り入れたのだが、アンケート回答の「良かった点」については、「話し合い」「グループワーク」などの言及が多く、考えさせられる。今後各論を学んでいくために、まずは特別支援教育の基本的知識を習得してほしいという思いがあるのだが、学生たちにとっては退屈な面もあるかもしれない。来年度は、講義形式部分を少々簡略化し、アクティブラーニング形式をもう少し取り入れていきたい。

今回は、講義中にアンケート記入を依頼するのを忘れていたので、回答率が低かった。来年度は、授業中に忘れずにアンケート記入を促していきたい。

本授業では、知的障害者の教育課程と指導法についての基礎的な知識を講義するだけでなく、事例研究を通して、授業の一部や指導法等について、自分で考える時間、グループでディスカッションする時間、全体共有する時間を確保した。このようなステップによって、学生が授業での学びを深められるようにした。また私の教員経験や教育現場の現状と課題を話すことで、学生が教育現場のイメージを抱きやすくした。授業方法は、毎回パワーポイントを使用し、教室全面に映し出す資料と同じ内容のレジュメを用意した。また、文字情報だけでなく、イラストや写真、映像を用いて説明することで、学生が講義内容を理解しやすいようにした。学生が個人やグループで発表した後は、発表内容・方法でどのような点が優れていたのかを、具体的な言葉で賞賛した。

聴覚障害を有する学生が受講していたため、他の先生はじめ、障害学生支援室のスタッフの方、てくてくの皆さんと連携し、当該学生が授業に参加しやすいよう配慮を行った。具体的には、毎回ノートテイクを行う、グループディスカッションのときは教室配置やメンバー構成等を配慮する等であった。

本授業の履修者32名のうち、18名が授業アンケートに回答した(回答率:56.3%)。設問1では、「強くそう思う」または「ややそう思う」と回答した学生は、15名であった(83.3%)。この結果から、多くの学生は、授業で指示された課題・参考文献・資料等を自ら参照した上で、自分で問題点を深く考え、その考えに基づき行動したと考えられる。

設問2では、「強くそう思う」または「ややそう思う」と回答した学生は、12名であった(66.7%)。一方、「あまりそう思わない」または「全くそう思わない」と回答した学生が2名いた(11.1%)。この結果から、半数以上の学生は、授業を受けた上で自ら関連項目について文献やインターネット等で調査し、新たな思考を展開したといえるが、一部の学生にとっては新たな思考に至るまでではなかったと考えられる。

アンケート設問5(前期の授業で良かった点:自由記述)では、学生7名が回答した。「実践的な学びができた点」「グループでの活動が多かったため、自分の考え以外の考えをたくさん吸収することができた」「グループで指導案や指導計画を考える授業が何回かあってとても良かった。今まであまり考えることになかったことを考えることができたし、実際に働いたとき、どのようなことをするのかを知ることができた」「みんなで話し合う時間があつた」「グループワークがあつた点、先生の経験談をお話してくれる点、発表の良いところを褒めてくれる点、前回の質問に答えてくれる点」といった回答から、グループディスカッションの時間を設けたこと等が良かったと考えられる。また、「行動分析についてすごく興味をもつた」「実践メインで、通級による指導を多く取り上げていたので、とても参考になった」といった回答から、私自身の専門性や教員経験を授業の中で話したことが良かったと考えられる。

アンケート設問6(前期の授業で良くなかった点)では、学生1名が「特になし」という回答であった。このことから、特に大きな問題はなかったと考えられる。

今後は、履修者全員が、自ら授業の関連項目について文献やインターネット等で調査し、新たな思考を展開できるよう、より多くの文献等を紹介する、学生が探求したいと思えるような内容を授業で取りあげる、といったことを改善案として取り組んでいく。

- ・実習系授業に関して、学生自身の主体的学習活動が行われていた。
- ・講義に関して、一部遠隔と対面の同時進行のハイブリッド方式とした。準備進行も大変であったが、学生の反応としては、時間調整が不要となりコロナに対する不安があるため、「ありがたい」とする声もある一方で、「遠隔授業を受講していた友人の話だと、先生の声が上手く聞こえなかった」という意見もあり、機器への準備や使用に関するむずかしさを感じた。
- ・内容に関しては、後半は学生の発表を取り入れることで、学生の能動性を引き出し、フィードバックによって自信がついたという評価を受けた。

- ・遠隔授業を中心にしながら、三回、授業分析、活動や体験の対面授業を実施した。遠隔授業では、テキストの内容を簡潔に整理した資料、および、考察する視点を示した資料を掲載したり、適宜、視聴覚教材を取り入れたり、ディスカッションのためのフォーラムを取り入れたりした。また、課題の負担感を軽減するように配慮した。対面授業では、視聴覚教材による生活科分析、大学探検、おもちゃづくりの活動を通して、生活科の授業における教材研究について学習する機会を設定した。
- ・アンケート結果では、参考文献・資料などを参照して授業の課題に積極的に取り組み、それを発展させた受講生が多いと言えるが、十分でない者もかなりいる。自由記述の内容を見ると、遠隔授業において良くなかった点が多く見受けられる。受講生同士の意見交流のためフォーラム機能を取り入れたが、私自身がその使い方に慣れていなかったため受講生を混乱させたこと、1年生の前期では受講生自身が「まなびネット」の使い方に慣れていないことが原因だと考えられる。今後、この反省を踏まえて改善に取り組みたい。また、本授業の目的・内容・方法等に関しては、受講生にシラバスを読むよう、何度か指示することも必要だと感じた。詳細なシラバスを作成しても受講生が見て理解しなければ意味がないからである。

・受講者数が少ないので、緊急事態宣言中以外は対面の授業を行った。一方的な講義にならないように基本的な内容について解説した後、受講生の疑問、意見、感想等を発言する機会、グループでディスカッションする機会を積極的に取り入れた。授業内容については理論的な内容と実践的な内容のバランスに配慮し、適宜、視聴覚教材を活用した。また、理論と実践を往還できるような課題の設定に心掛けた。

・アンケート結果から、参考文献・資料などを参照して授業の課題に積極的に取り組み、それを発展させた受講生が多いと言えるが、十分でない者もいる。今後、さらに多くの受講生の主体的な学習態度の形成につながる授業の方法・内容の改善に取り組みたい。

・少人数の演習授業なので、緊急事態宣言中の遠隔授業においてもリアルタイム型を採用した。それゆえ、大差のない授業が実施できた。演習の授業ではディスカッションが何より重要であるため、自由に疑問、意見、感想等を言える雰囲気づくり、授業の展開に心掛けた。また、新しい見方・考え方、批判的に分析・考察する観点を伝えて解説するのではなく、自ら気付くような問いかけ、応答を行った。

・アンケート結果から、本授業の目的はほぼ達成されていると言えるが、さらに、授業の方法・内容について創意工夫したいと考えている。

オンデマンドによる遠隔授業を中心として行った。実技指導については毎回提出された課題に対してできるだけ丁寧にコメントを付けるよう心掛けた。また理論的な説明は動画資料を提示し、繰り返し視聴することで理解を促せたと考える。

ただ、対面授業の効果の一つである、人前で演奏する、他者の発表を見て自身を振り返ることは遠隔授業では難しいため、今後の授業で補っていきたい。

zoomによる遠隔授業と対面授業の併用で行った。対面授業はクラスを半数ずつ2グループに分け、ハイブリッド方式を採用した。コロナ感染拡大の状況によって対面授業の予定が直前で変わることがあり、学生の実習期間によって連絡が十分に伝わらないなどのトラブルがあった。

ただ、対面授業を行うことによって文字や資料だけでは伝わらないことも体験を通して伝えることができたのではないかと考える。

課題としては、授業の振り返りのための問いかけなどを工夫し、学びをより深められるよう促したい。

コロナ感染対策として、少人数のグループに分け個別に対面・遠隔を併用し授業を進めた。

回答者数が少ないため参考にはならないが、回答者全員が問1・2とも「強くそう思う」「ややそう思う」と答えたことは良かった。今回未回答の学生についても満足が得られるよう取り組んでいきたい。

オンデマンドによる遠隔授業を行った。毎回の課題に対して丁寧にコメントを付けることを意識した。

理論についての説明は動画資料を繰り返し視聴することで理解を促した。

また学生の必要に応じて対面による個別指導も行ったことでより学習効果を高めることができたと思う。

担当する授業のほとんどで、動画を作成して、オンデマンドの授業を行った。動画では、説明が必要な部分にキャプションを付けたり、制作する部分では手元が映るようにカメラの配置や作成方法を工夫した。アンケートからは、オンデマンドの授業であった点と動画を使用した点から、内容が細かいところまで確認することができたことや何度も繰り返してみながら制作ができたことなどの意見が多かった。その一方で、同じ授業の受講生の作品を見ることができなかった点や、材料を自分で用意しなければならなかった点について、改善を求める声があったことから、今後はそれらの点についてできる範囲で改善していきたい。

【独自に工夫している点】

遠隔授業(オンデマンド型)では昨年度作成した授業動画を大幅に作り直すことになった。動画の作成に際しては、見やすいスライド作り、情報の明確な提示、分かりやすい授業展開、教科書や補足資料への効果的な指示(関連づけ)に注意した。

【アンケート結果を受けての改善点】

アンケート結果から見て、授業の教育目標はある程度達成されたと思われる。教育をめぐる状況の変化はめまぐるしいので、毎年、新しい情報を盛りこんでいく工夫を続けたい。

オンデマンド型授業では、受講生相互の意見交換の場を設定することが難しかったが、「まなびネット」の「フォーラム」をある程度活用することができた。受講生の側の「慣れ」も要因になったと思われる。

課題(小レポート)の頻度は、授業3回につき1回とした。このレポート提示のタイミングや提出期間までの時間的な余裕については高評価をえることができた。課題に対するフィードバックにも心がけてきたが、受講生によっては不十分に感じている回答もあった。この点が、今後の最大の課題だと考えている。

私の科目は、MSが2科目、BSは1科目の結果があります。その内、MSの評価が高いです。なぜなら、たぶんMS科目の内容は専門的なので、または選択科目なので、学生がシラバスをちゃんと読んでから履修します。BS科目では、約30%の学生はまあまああるいは良くない評価をしました。

緊急事態宣言を受けて、対面式からオンデマンド式に変更した授業もあり、学生の中には少々混乱した者もいたかもしれない。学びネットでの教材掲示や小テストなどを活用した。アンケートはそれなりの回答が多かったが、回答率が半数を切っている科目が多いことが気になった。後期授業は、対面を中心に、学生の積極的な取り組みを促したい。

授業方法について、独自に工夫されている点としては、毎回プレゼンテーションソフトやGoogle formsなどのICTを活用して学生の内発的動機づけを高める講義を心がけている。主として、授業の前半は理論的解説(含む映像教材を用いた学習)を行い、後半は「ロールプレイ」や「実習」を随時取り入れ、学生自身が主体的に授業に参加できるよう工夫している。さらに、授業の最後には毎回「リアクションシート」を配布し、次の授業の冒頭にプレゼンテーションソフトを使い学生の質問に回答することで、双方向の授業を心がけている。アンケート結果については、オンデマンド授業のため回答数が少ないため、今後、積極的な回答を授業内で働きかけ、授業改善へと活かしていきたい。

対面に戻すこと、平時に戻せることを意識して、例年に近い授業を展開した。前期は演習や実習など、少数での授業が多かったので、アンケートを受けての改善点は特にない。

令和3年度も新型コロナウイルスの影響で前期の講義科目は全てオンデマンド式で実施した。動画資料については、説明の簡潔さに関して学生から評価を得た一方で、レジュメを配付していなかったのも、(その回の)講義の全体像が把握しづらかったという意見がみられた。レジュメ配付については今後の改善点である。また、昨年度のオンライン授業の実施により、目が疲れるといった訴えを学生から聞いていたので、意図的に休憩の時間を挟むように工夫を行ったが、それを良いと思ってくれた学生がいた一方で、不要であると感じた学生もみられた。

今年度前期は、対面と遠隔とが混ざることとなり、遠隔部分においては、対面で行っていた講義の雰囲気と変わらないうち努力したが、受講者の表情が見えない分一方的な説明となったように感じている。各回の終わりに、意識を向けてほしい話題や理解を深めることにつながる話題が提供できるよう心掛けたい。

対面授業を計画していても、緊急事態宣言の発令で、全て遠隔授業となってしまった。生活科の授業は実体験を通して、実感として理解してもらおうとしたが、それが対面で実施できなかったのも、学生が個々に、自然と触れ合ったり、制作活動を行うことを課題とした(十分ではなかったが)。初めに自分の考えをもち、他者との対話により、その考えを広げたり深めたりしようとしたが、直接の対話が出来なかったのも、他の学生の意見をできるだけたくさん資料に掲載して、自分の考えと比較できるようにした。

まだまだ知らないことが多いですが、大学の方に相談しながら、これまでの経験で学んだことや調べて学んでいることなどを授業で生かそうとしています。また、アンケートなどにより学生の声も聞きながら授業方法などを決めたりしています。遠隔授業の場合、パワーポイントを使ったスライドショーにしています。対面授業の場合、プロジェクターやカードなどを使ったり、会話を練習したりしています。連絡方法は、メールやラインを使っています。授業のメソッドは、前期も独自で考えた「パズル」という文章の作り方を使いました。このメソッドでは、ポルトガル語の複雑な文法が面白いパズルのように見られると思います。課題は、学生さんが書いて回答するものと録音するものにして、その課題のフィードバックを積極的にやって、遠隔授業であっても、学生さんはポルトガル語を聞く、話す、読む、書くことが出来たと思います。これからも精一杯努力して、将来学生さんが先生になったときに役立つポルトガル語を教えていきたいと思っています。また、学生さんが、自分で問題点を深く考え、新たな思考を展開できるような授業教材などを作りたいと思っています。

私は普段は常勤職で別の仕事をしていて非常勤でここにきている立場なので、できるだけ現場のリアルな感じを感じてもらいたくて事例を用いたり、私自身の職場での体験を基に話を進めていきました。そのことに好意的な意見を学生からいただいたのはありがたかった。

また、なるべく学生が主体的に学習するようにとグループ活動を設けてそれぞれに関心のあるテーマを調べて発表する授業を行ったが、興味をもって参加して楽しんでた学生がいた一方で、そのためだけに授業に来るのを面倒だと感じた学生もいたり、グループはとりあえず組んだため仲良い人がいなくて大変だったと話される学生もいたりしたため、難しさを感じる。しかし、支援職を目指す学生には、仲の良し悪しに関係なくグループでの共同作業は欠かせないのではないかとと思う。

・感染症対策をとりながら、できる限りペアトーク、グループ交流を行って、協働的に学びを深められるようにしている。
・授業の終末に講義内容を受けての演習や講義内容についてわかったことや学びを深められたこと、疑問点などを字数制限をかけて学生自身がまとめる時間を設定することにより、理解の定着を図るようにしている。
・授業の事前、事後に学生の要望に応じて、講義内容のプレゼンPDFを送付し、予復習ができるようにしている。

1年次Sh(1)科目では①栄養学の基礎知識と考え方を身につけること、②高校までの「生徒」としての受動的な学びから脱却し、学部の「学生」として能動的に知識を得られるよう講義だけでなく自ら教科書、参考文献にあたり、疑問点を明らかにし解決する能力の養成を図っている。授業を基礎と応用に分割し反転授業を行なっている。質問に関しては対面授業時の他、メール、授業公式LINE等の複数の方法を準備している。
2年次Sh(2)科目では、①栄養学の基礎的な知識を応用する能力を主目的としつつ、②情報を取得し整理する練習(最終レポート作成)、③他者との共同作業の練習とプレゼン能力(グループ発表)の養成も図っている。レポート課題はレポート作成の方法論を演習の中に組み込み、ルーブリックと査読システムをとっている。
3年次Sh(3)科目では①栄養素から食品そのものに視点を移して検討することで知識の拡充を図るとともに、②ディベート形式でのプレゼンテーションを行うことで口頭での議論をする方法論を身につけることを目的としている。科学的な態度で論点を整理し議論を行う能力を要請する。

原則として、まなびネットと動画等を活用している。
学習者がリフレクションできるよう、すべての資料等はデジタルで提供している。また評価についても、まなびネットで学習者自らが確認できる。
授業によりアンケート結果に差がある。特に低い学年でゼミ形式に近い授業は、難しさがあるようだ。丁寧に意図等を説明していきたい。

自専攻の1～3年生に対し、9科目の授業を担当している(ゼミは除く)。従って、徐々に学修内容に深まりを持たせるように系統立てて授業を実施するとともに、各種実習とも連動させながら講義と実践力の双方が身に付くように工夫をしている。今回の結果を見るとおおむね達成できているように思われるが、コロナ禍で実践的な授業が不足したことは否めない。後期は、対面授業を主として実施し、お互いの意見交換場面や学生自身が発表・運営する部分を多く設定し、受け身ではない授業実施方法を心がけたい。

オンデマンド開講であったため、個々の学生が行った事例の読み取りを共有する方法を工夫した。まなびネットには様々な機能があるが、結果的には全員の読み取り内容をまとめたものを示し、それに対するフィードバックを行うスタイルを用いた。普段の授業では全員の読み取り内容にじっくりと目を通す時間が取れないが、オンデマンド配信のおかげでそこに時間をかけることができたようで、学生によっては満足感が高かったようである。ただ、対面で実施するからこそその学びは当然あるので、来年度以降はハイブリッド型の授業を展開することも必要であろう。

担当する3年次前期の演習科目では、知識や技能の基本的な水準の習得が可能になるよう、ロールプレイや事例検討を取り入れた授業を行っている。こうした内容は対面では取り上げやすいが、遠隔では展開が難しい。今後も遠隔実施が必要な場合には、遠隔の利点が活かせるような授業展開を工夫をしたい。

本学期は対面形式で実施した。
学生自身の実習に対する自己課題が明確になるように、保育実践、保育教材の開発、指導計画の作成と個別指導、模擬保育などを組み込んだ。
指導計画の個別指導は、大学院生として在籍中の現職園長に依頼した。学生一人ひとりに繰り返し対応していただき、学生には大変好評であった。

データを提示しながら説明を行っているものの、受講生が主体的にデータを調べるというまでには至っていない点が反省点である。来年度以降は、この点を改善したいと思います。

○ 2021年度前期の授業では、新型コロナウイルス感染症の感染状況を踏まえ、授業内容に応じてより効果的な学びとなるように遠隔授業と対面授業を行うようにした。主担当として実施した授業に関するアンケート結果から、授業方法に関して改善を求める声はほとんどなかったのが、概ね理解が得られたと思われる。

○ 養護教諭を目指す学生にとって、養護教諭としての経験や必要な知識や技術に関する授業内容に関心が高く、学修意欲が高まることをアンケート結果から読み取ることができた。理論と実践の両面を大切にしたい授業を今後も心掛けていきたい。

○ 遠隔授業における実習科目の実施にあたり、学生同士のコミュニケーションや情報共有スキルを高める必要がある。タブレットなどのICTを活用する力は養護教諭養成においても重要であることを実感しているため、今後、授業内容に取り入れていきたいと思う。

・毎時振り返りシートを記入させ、授業内容の理解について確認を行うとともに、振り返りシートに記入された疑問や質問に対して、次回授業の初めに回答と解説を行うことで理解を深めている。

・授業では、毎時「work」を設けて、主体的・対話的にworkに取り組ませ、より関心を持って授業に入っていけるように工夫している。

・授業の内容をさらに深めることができるよう書籍やWebなどの情報をいくつか取り上げ、より関心を持って考えられるように紹介をしている。

・自治体職員や学校の教職員をゲストスピーカーとして招く機会を多くもうけ、理論と現場の実践の往還的な授業を行うことで、より関心をもって授業に入っていけるように工夫している。

なるべく新しい、信頼できる(官公庁などの)データや新聞記事を使用し、学生に問を投げかけ、考えさせるようにしている。4年生は特に、グループで話し合い意見を発表させることに重点を置いた。

挙手により質問できない学生もいるので、コメントシートに質問を書けるようにし、その回答を次の授業にて扱うようにしている。

おおむね、この授業スタイルは評価されているのではと思う。

とくに実習関係科目は結構課題も多いがそれに対して真摯に取り組んでいるのでこれを継続し、さらに学びを深められるよう学生－教員との対話を強化していきたい。

オンデマンドで開講したE科目において、できるだけ学生に考えさせたり調べさせたりする課題を盛り込んだ。「自分事」として考えてもらえたかどうかは分からないが、考えたり行動したりするきっかけにはなったと思われる。学生からのコメントに話し方にかかわるものがあったので、より聞き取りやすい話し方を心がけたい。

<工夫している点>

・学生の興味や関心に応じて、発展的に学ぶことができるよう、参考となる図書などをいくつか選定し、アクセスできるようにしていること。とくに学生に一度は読んでもらいたい教材については、PDFにスキャンし、クリックするだけで読むことができるようにしていること。

・昨年度の授業評価のなかで、学生間の意見交流の場が少ないと指摘されたので、今年度からは課題のいくつかについては、教員宛に提出させるのではなく、「フォーラム」(掲示板)に提出させ、お互いの考えを確かめ合う機会を設けたこと。

<改善点>

・学生の負担を考慮して、課題を出す回数を制限してきたが、アンケート結果を踏まえ、過度な負担にならない程度に課題量を見直したい。

・理論と実践が結びつくように、できるだけ具体的事例を示しながら学習資料を作成した。現場で実施された授業の記録や写真等を盛り込み、学生が授業のイメージを高めながら学習できるよう考えた。

・3年生の授業で教育実習が控えていたので、「実践」ということを意識しながら講義を展開した。反省の中に「この講義が実習に役立った」という記述があり、そういう思いをもってくれた学生がいたことにホッとしている。

・レポートに対しては必ずフィードバックをした。結構大変ではあったが、学生とのコミュニケーションの一端になればと思った。しかし、やはり、1対1のコミュニケーションになってしまう。「他学生との意見交換ができなかった」という反省があり、学びネットを利用してどのような方法で還流ができるのか、今後の課題である。

世界史や日本史に苦手意識がある学生もいることをふまえて、どのような時代にどのような教育が行われたり、どのような理論家が現れたのか、学生にイメージのわきやすい資料(動画含む)を毎回提供するようにした。また、遠隔授業だが他の学生の考えにも触れられるように、毎回の様々な学生のコメントを多く紹介するようにした。

1回の授業で扱う内容が多すぎないように気を付けている。また、できるだけネット等で簡単に調べることができる内容と関連付けるよう努力している。今後は、既習事項の確認のためのコミュニケーションを増やしたいと考える。

まなびネットでのオンデマンド型の授業が多かったため、毎回、課題を出した。また掲示板を設置して、質問にすぐに対応できるようにした。

昨年度の機械音声に対する否定的な意見を踏まえて、全ての動画に、逐語に近い字幕を付けるようにした。アンケートの結果からは、字幕の効果があったことが伺えた。
感染状況が悪化したため、予定していた対面の活動の代わりにオンライン上で相互のコメント交換をできるフォーラムを設置した。(対面と全く同じ効果は難しいが、肯定的なコメントがあり、ある程度は意味があったのではないかと思う。)
昨年度のアンケート結果から、課題提出までの期間を十分にとっても、授業コンテンツの公開時間がずれると、課題をする時間が取りにくいことが分かったため、公開時間をできるだけ一定にするように心がけた。
その場での質問や他の学生と情報交換が難しいため、(×切だけでなく)いつから課題を提出してよいのかといった細かい情報も明記しておく必要があるかもしれない。
パスワード入力に面倒という意見があり、意図を説明する必要があると感じた。

前期授業においては、50人規模の授業において、全体を二つのクラスに分け、対面-オンデマンドを交互に実施する形態を取った。残念ながら、早い段階で緊急事態宣言が発令され、その後はオンデマンド講義のみとした。
オンデマンド講義においては、前時の授業感想のいくつかをピックアップし、それに補足や応答する動画を作成した。その後、本時の授業動画へと進む形をとった。
設問1については、「強くそう思う」「ややそう思う」が全体の8割に達しているため、各回の主旨については概ね理解を図ることができたと言える。
しかし、設問2については、自ら発展的に学びを深めるまでには至らなかった結果があり、発展的な学習課題や論点の提示などの工夫が必要かもしれない。